

北の海鳥

二十二号



『北の海鳥』二十二号
令和7年12月30日
北海道海鳥保全研究会
札幌市西区発寒7条14丁目



松丸を操船するまっちゃん 2010年7月9日 伊藤元裕

目次

特集：天売島の柱、青塚松寿氏に贈る言葉

- ・巻頭の挨拶
- ・青塚松寿さんとの思い出
- ・心優しい超人 松ちゃん
- ・思い出の写真がない
- ・最後まで「さすが、まっちゃん！」でした
- ・『鉄人』松ちゃんととの思い出
- ・まっちゃんは天売で何を見てきたのか？
- ・まっちゃん、ありがとうございました
- ・偉大なるバンダー、まっちゃんを偲んで
- ・天売島調査での恩
- ・天売島のまっちゃんを偲んで
- ・青塚さんとの思い出
- ・松ちゃんととの思い出
- ・さようなら青塚さん…
- ・マツツとの思い出
- ・青塚さんのこと
- ・いつも見守ってくれていた青塚さん
- ・天売島の海鳥関係者が集う交流拠点
- ・青塚さん追悼
- ・青塚さんとの思い出
- ・天売島の超人、青塚さん
- ・環境省天売支部!?の青塚さん
- ・青塚さんの優しさに感謝を
- ・まっちゃんとの思い出
- ・青塚さんを偲んで
- ・終わりに 思い出は続く

北海道海鳥保全研究会	2
綿貫 豊	3
福田 佳弘	5
新妻 靖章	6
富田 直樹	7
伊藤 元裕	8
先崎 理之	9
大門 純平	13
庄子 晶子	13
中嶋 千夏	14
大島 康平	14
松本 和也	15
富士元 寿彦	15
有田 智彦	16
齊藤 暢	17
岩澤 光子	18
長谷部 真	18
松井 晋	22
木内 裕也	23
矢萩 樹	23
岩原 真利	24
原中 つかさ	26
越宗 菜保美	29
先崎 啓究	30
長繩 淳	32
綿貫 豊	33

特集：天売島の柱、青塚松寿さんに贈る言葉

巻頭の挨拶

北海道海鳥保全研究会 長谷部真・先崎理之・矢萩樹

天売島で鳥関係者なら知らない人はいない、青塚松寿（通称：まっちゃん）さんが令和7年10月30日に七十七才でご逝去されました。青塚さんは7人兄弟の4番目の長男として天売島で生を受けました。漁師であり、建設関係の仕事に従事しながら、天売島の海や自然を熟知し、野鳥愛好家・鳥類標識調査者でもありました。天売海鳥研究室の海鳥研究や環境省のウミガラス保護増殖事業への貢献は計り知れなく、天売島の柱として何世代にわたり「弟子」たちを支えていました。

青塚さんはちょっとぶっきらぼうで言葉数も少なく自分を表に出さない控え目な方でしたが、多くの弟子たちのことを遠くからいつもやさしく気遣っており、いざというときはその超人的な能力を発揮し助けてくれました。そのやさしさから鳥関係者は青塚さんを慕っていました。どれだけの人が青塚さんによって天売島につながっていたことでしょう。

天売島に行くといつも暖かく迎えてくれた青塚さん。「体がキツイ」と言いながら寝込んだことなどなく、いつも元気でいつまでも元気であることを誰も疑うこともありませんでした。そんな青塚さんが急に調子が悪くなったという知らせを聞いたのはこの9月のことです。青塚さんらしく詳しいことは一切知らせず、一部の限られた関係者が断片的な情報から憶測を語るだけでした。そしてあっという間に青塚さんは皆の手のとどかないところへ行ってしまいました。多くの知人はすべてが終わってから悲しい知らせを知りました。もうフェリーに乗って天売島に行っても、港でにこにこしながらいつも迎えてくれていた青塚さんの姿はありません。

これだけお世話になっているのに、さよならも言わずに黙っていなくなりいつのまにか忘れ去られてしまう訳にはいきません。少しくらい思い出に浸りお礼を言わせてください。天売島でまっちゃんと楽しい時間を過ごした日々の記憶を決して忘れないために、私たちは特集を組み、青塚松寿という「柱」が天売島にいたこと、そしてかけがえのない思い出が消えないように贈る言葉を残すことにしました。この度は短期間にもかかわらず多く方から溢れるばかりの青塚さんへの想いをいただき、その偉大さを改めて感じました。人前にさらされるのが嫌なまっちゃん、今回ばかりは非礼をお許しください。

青塚松寿さんとの思い出

綿貫 豊

これまで天売島での海鳥調査を、北大他多くの研究教育機関の研究者が参加して、私の卒論の年から数えると40年近く続けてきたが、これは、全く、青塚氏なければ成し遂げられなかつた。土木建設会社に長年勤められ、もちろん漁師としての腕も抜群で、しかも、島で鳥類標識調査員として多数の鳥類を捕獲し標識した経験を持つ、青塚氏から学ぶことはとても多かつた。また、海や漁のこと、島の森や花のこと、昔の生活の話を伺うのも楽しみだった。何かと私どもの事を気にかけていただき、とりわけ、調査について悩んだときや、失敗した時に相談にのっていただいたことはとても助けになった。崖でのウミウの捕獲のことなどにかでうまくいかなかつた時だと思うが、その話をしたところ、「失敗は成功のもと」、「では、すこしちがうことをやってみる」といわれ、なんとか工夫してうまくいったときは本当にうれしかつた。感謝してもしきれない。

今年、10月21日、羽幌にフェリーが着岸し、2~3人が下りた後、あらかじめ電話で打ち合わせの通り、吉川さんに呼ばれ中に入った。ものが食べられなくなつて、羽幌病院に入院する青塚氏は、6月中頃お会いした時とくらべ驚くほど痩せていたが、とても穏やかな顔をしておられた。待機していた救急車に移つた後に、その中で少しだけ話しをした。雪模様の中、札幌から車で來たことがわかつたのだろう。「帰り、気を付けてな」。私にとってはこれが青塚氏の最後の言葉だつた。その後、島でウトウの巣箱埋設を終え、10月30日、海は時化ていたが天氣は良かつたので、早朝、島のフットパスを1時間ほど歩いての帰り、

枯れ木をつついていたアカゲラが空に飛び立つのを見た。なんだか気になってお宅におじゃますると、姉さんが電話しておられ、玄関に立つ私を目で招いた。青塚氏が亡くなつたとの知らせだつた。

1977年7月初め、大学入学したての夏休み、友人と二人で海鳥の楽園といわれる天売島に1週間キャンプに來た。どこでキャンプできるか調べもせず、とにかく島の一番高いところに行つたら、そこに大きなテントを張つて仕事をしているお兄さんがいた。沖合を通る大型調査船の支援をしているとのこと。眺めが最高だったのでここにしようと決めた。そこが古灯台だつた。周囲には今と違つてチシマフウロやハクサンチドリ、エゾカンゾウが咲き乱れており、海に向かう斜面には一面ウミネコが繁殖していた。屏風岩の上はもちろん、左手の谷の先の岩棚にもウミガラスが繁殖していた。翌日だつたか、午前中、原付のマウンテンバイクにまたがつて、古灯台まで上がつてくる人がいた。青いつなぎに青のヘルメット、レイバンのサングラスをかけている。監視員らしい腕章をつけている。この兄貴はなんなんだろうと思った。それが青塚氏だつた。「ここ一応キャンプしてはいけないんだがなあ,,,、まいいか。気を付けて」といわれた。おかげで日没後のウトウの騒動や日中のウミネコの騒がしい鳴き声を満喫でき、これがその後の私の人生の一部となつた。その時のことをいつか青塚氏に話そうと思っていたが、機会を失つてしまつた。

その後、天売島で1980年に卒業研究でウミネコの研究をすることになり、指導教員の先生から山階鳥研を通して、青塚氏へ正式な紹介のお手紙を出していただいていたようである。その年と翌年には古灯台でキャンプしたが、その時も青塚氏は時々様子を見に来てくれた。週1回くらい、買

い出しと風呂に入るのを兼ねて、番屋でやっていたユースホステルに泊ましたが、青塚氏はたいがい訪問されていた。その頃は父さんも母さんもお元気で、家に伺ってお話ししたこと覚えている。1984年と1985年には博士研究をすることになり、野上さんの元の家をお借りしていたが、ユースに来ていた同年代の若者と夕飯をこの家で食べるときには、いつも肉やビールを差し入れいただいた。自分の顔写真を絶対に撮らせない青塚氏の、この宴会の時のとておきの写真があるのだが、ここで出すのは控えておこう。

20年近くお借りしていた元郵便局で焼き肉をする際のバーベキューコンロを作成いただいたのも青塚氏である。いつも参加いただいていた。差し入れをもって。また、学生の研究で使うウミウの飼育小屋やカモメ類の大型捕獲わななども青塚氏に作成いただいた。物を作ったり、直したり、手では運べないものを運んでいただいたら、本当にお世話になった。その頃はもう私自身が教員になっていたので、そこで調査に参加する学生を指導する立場ではあったが、経験豊富な青塚氏の筋のとおった様々なことに関する話は、学生にとって私の言葉以上に重要だったかもしれない。また、私が学生だった時そうだったように、学生にとって青塚氏と話すことは大いに励みになっていたと今になって思う。元郵便局の鳥研の居間のソファーで、酒を飲みながらいろいろ話しているわれわれを、ビンのコーラを片手にこにこしながらみており、「好きにすればいいじゃないか」などと、ときおり突っ込みをいれてから、「さあ、かえるか」といって立ち上がる姿が忘れられない。

青塚氏にいただいた魚貝類の差し入れはいつもありがたかった。ユースの庭先でバーベキューするときには、「ヒル貝やる

か?」と、青塚氏の家の前のかごに入れてある大きなヤツを沢山いただいた。焚火で焼いて食べるのが私も青塚氏も(たぶん)好きだった。また私がホヤ好きなのを知っていて、ときどきいただいた。潜水作業中にわざわざ獲ってくれた新鮮なホヤは、三陸地方で養殖してスーパーで売っているマボヤとは種類が違うようで、苦みが少なくうまかった。元郵便局に移ってからは、早い時期には、刺し網でとれたホッケをたくさんいただいた。しかも、ちょうどいい大きさの脂がのっているのを選んでいただいていたようだ。慣れないで苦労したが、開いて一夜干しにしたのを焼くと、最高だった。釣ったソイ類も私が行くといつもたくさんいただいた。刺身にして、あらは煮つけか潮汁、他ちょっと小ぶりなのは得意料理のアクアパツツアにした。私がいる間の穏やかな日を狙って、わざわざ釣りに行っていただいていたのであろう。ここ何年かは秋にはいつもマグロを送っていただいた。家内も大喜びだった。いろんな部位をいろいろに食べるのを知っていただいているようだ。カマ、ハラス、背と尾身と、気を使って色々入れていただいていたようである。いつもいただく春先の生ワカメも肉厚でおいしかったし、塩ワカメは年中重宝した。こうした青塚氏の心遣いがありがたかった。

こう思い出してみると青塚氏にはお世話になりっぱなしだった。今年の海鳥の繁殖状況や餌の話やウトウやウの採食場所や潜水行動など、青塚氏の知らないことを話すことくらいしかお返しができなかったのだが、いつも興味を持って聞いてくれ、自分の経験や知識と照らし合わせておられた。しかし、青塚氏との共著論文はたった2編だし、学会などの発表もほとんどお話していなかつた。まったくもって気が利かなかつたと思っている。天国に届けるわけ

にもいかない。まだまだ書ききれない。悔やむことばかりである。もっとお話ししたかった。もっといろんなことを教えていただきたかった。そしてもっと遊んでいただきたかった。

心優しい超人 松ちゃん

福田 佳弘

青塚松寿さん（松ちゃん）のことを書くのは自分では早過ぎるような気がします。まだ、松ちゃんがいなくなったとは信じたくないです。今でも電話がかかってくるような気がします。悲しい現実を受け入れたくない感じです。

私が1991年ウミガラスの調査に入ったころの松ちゃんは特別に警戒心が強く、特に鳥の調査に来る人には警戒心が強かったです。1年目はほとんど話してはもらえず、2年目のある日、鯨番屋で偶然出くわしてしまい、そこから急激に親しくなっていきました。

松ちゃんは、キャリアの年数は解りませんが古くからのバンダーでした。夜になるとウトウのバンディングに二人で出かけました。どちらが早く50羽に足環を付けられるかを競争しました。競争といっても闇雲にウトウを捕まえる訳ではありません。嘴に餌を咥えている鳥は、雛が飢えては可哀想だから捕まえない。ウトウの巣穴を踏み抜かない。などなど、ウトウを上手く捕まえるには、なるべく光量の大きいヘッドライトを付けてウトウの目をくらませて捕まると良いなど色々と教えてもらいました。ウトウの巣穴だらけの凸凹の夜の天売島の斜面を松ちゃんはスイスイ歩いてウトウを次々と捕獲していきます。その頃の松ちゃんは40歳代、私は20歳代でしたが、松ちゃんに勝てる日は少なかったです。

バンディングでいうと、その年は春の渡りに珍鳥が多く、シロハラホオジロ・キマユホオジロなどが次々と捕獲できました。コホオアカが網場近くにいて、かからないかな～！と固唾を飲んで観察していました。そこに長～く柄を伸ばした捕虫網を持った松ちゃんが現れ、抜き足・差し足で、コホオアカをバッタを獲るように捕獲しました。眼が点になるような出来事でした。そのコホオアカは弱っていなくて元気な個体でした。小鳥を捕虫網で捕獲する人を初めて見ました。同じように試しましたが、私にはできませんでした。

松ちゃんは、キクイタダキを捕獲されても足環を付けませんでした。「なんで？」と聞くと「小さいのに可哀想だべさ！」と言っていました。そして、一番小さい足環の1番リングはペンチを使わないで、指で絞めていました。かなり指の力も強かったです、彼は、バンディングで一番大切な事「鳥を傷めないコト！弱らせないコト！」を大切に守っている心優しい方でした。

松ちゃんの本業は漁師でしたが、土木作業や潜水土もしてました。天売島はウニの産地で夏の間はウニ漁が盛んにおこなわれていました。天売のウニは二種類いて、ムラサキウニとエゾバフンウニです。天売では、ムラサキウニのことを「ノナ」、バフンウニのことを「ガンゼ」といいます。ウニ漁は一斉に出漁して、一斉に港に戻ってきます。そのときに、松ちゃんのウニの荷揚げを手伝いに行くのですが、その時の話題は「今日マツツ（島ではマツツと呼ばれている）はどんだけ捕って来た？」という

話になります。どの漁師よりもガンゼを船に満載にして帰ってきます。島一番のウニ漁師でもありました。ガンゼはノナよりも数が少なく値段も高いので、シーズン中は相当稼いだんだな～と思いました。

魚釣りも相当な腕前で、魚群探知機が入っているように絶好のポイントに船で行き、次々とソイを釣って行きました。野生の勘というか、特別の能力を持っているんだな～と感じました。

島の人からもよく「マツツは超人だ！」という話をよく聞きました。双眼鏡なしでも遠くの鳥を識別する。崖の上から海にい

るタコを見つけて崖から降りて海に飛び込んでタコを捕まえた。屏風岩（50mほど）の切り立った崖をザイルなしで登った。大人二人で動かそうとしても動かなかかった昔の防火用水槽を軽々動かした。潜水土仲間が言っていたのが、潜っても酸素ボンベの酸素がマツツは俺らの半分も減らない。などなど超人伝説が数々あります。

そんな超人の松ちゃんも病になってしましました。お別れの言葉も言えなく、恩を返すこともできなかった事を申し訳なく思っています。

思い出の写真がない

新妻 靖章



2015年6月19日 てんてん（直接釣り糸を手で持って、上下に仕掛けを振る釣りのやり方）でホッケ？メバル？を狙う
青塚松寿さん

天売海鳥研究室（まだ正式名称がなかった名前）が立ち上がったのが 1996 年 4 月だった。それ以来、天売島に行くたびに

青塚さんには大変お世話になった。その時から写真を撮られることをとにかく嫌っており、カメラを向けると、「カメラよこせ、フィルムを抜き取るぞ」と怒られたものであった。鳥の写真は撮るくせに、何を言っているものかと思ったが、かなり本気なので青塚さんの写真を撮ったことはありませんでしたが、それから約 10 年後に撮らせてもらいました。しかし、逆光で表情が見えないので、加工した写真を載せたいと思います。2015 年 6 月 19 日 7 時 40 分と記録があります。この年は、ウミスズメの雛が海上にいるとのことで、探しに行くからと船に乗せてもらったときです。ウミスズメのほか、ウミガラス、ケイマフリなど多くの鳥たちを見た記憶があります。その何年か前は、クジラがいるからと、少し沖まで船に乗せてもらい、クジラを追っかけたこともあります。なんかいつもぶっきらぼうでしたが、とてもやさしく、船に乗せてもらうことが多く、調査というよりは、船に乗れるかもという期待で天売島に行っていたようなものでした。船に乗ると、とにかくでかいヒルカイをとってもらったことが思い出します。体が頑丈だったので、

常人では獲れない大きいものを獲ってくれましたが、もう少し小ぶりなカイの方が味はよかったです。いろいろな海の幸をいただきました。ある年に行った時には、研究室に食料が少なく、まっちゃんに会うなり、ヤリイカが食いたいと懇願したことがありました。夜には港で獲ってきたイカをもらったこともあります。漁師としての腕も一流なんだと感心したものでした。ミズダコもうまかったです。亡くなる年の5月に、青塚家のルーツが山形の

遊佐という小さな町なんだと言いました。最近、飛島のウミネコの保全で、遊佐のとなりの酒田に行くことが多く、この庄内地域には天売島へのルーツがあるのではなく勝手に夢想しているところです。お世話になりましたが、何もお礼ができません。鳥が好きだったので、せめてでも日本の沿岸から海鳥がいなくならないように努力を続けていこうと思います。いつも優しく親切にして頂き、本当にありがとうございました。ご冥福をお祈りします。

**最後まで「さすが、まっちゃん！」でした
山階鳥類研究所 富田 直樹**

私は2003年から3年間、天売島で調査を行いました。まっちゃんは、ほぼ毎晩天売海鳥研究室に様子を見に来てくれ話をしていました。ちょうどデジタル一眼カメラを購入したところで、プリンターでよく写真を印刷したものです。特にエピソードがあるわけではないのですが、写真などを見返していると、焼肉の際のドライヤーを使った豪快な火起こしや、まっちゃんの家の裏で巨大なミズダコを茹でたことなど、日常の些細なことが思い出されます。時々、船を出して鳥見に連れて行ってくれたり、家の裏のマルチトラップで捕獲したオオセグロカモメのバンディングなど、なかなかできない経験もさせてくれました。2006年からフィールドを青森県の蕪島に変えたので、まっちゃんとはそれっきりとなりましたが、2011年に山階鳥類研究所に入つてからは時々電話をくれるようになりました。珍しい鳥が天売に来てるぞとか、携帯

にまっちゃんの名前が出た時はまたおもしろいことがあったのかなと楽しみになったものです。

しかし、2025年10月14日にまっちゃんから電話がかかってきた時は、これまでと全く違いました。「もうだめだわ」、「かすみ網と足環を返すから、あとはよろしく」。すでに声はかすれ、話すのも辛そうでしたが、様子も少し聞かせてくれました。事前に調子が悪いと言うのは噂で聞いていたとはいえ、あのまっちゃんがと、やはりショックでした。「また連絡するから」と返すのが精一杯でした。それから数日して、標識調査関係一式がきれいに整えられて届きました。10月27日に電話しましたが、まっちゃん姉さんが出て、もう羽幌の病院に運ばれたと教えてくれました。

まっちゃんは何ごともきっちりしていましたが、バンダーとして最後まで責任を全うしてくれました。〇さんの言葉を借りるなら、最後まで「さすが、まっちゃん！」でした。今でも突然電話がかかってくるような気がします。これからも見守っていてください。ありがとうございました。



まっちゃんが家の裏に作ったオオセグロカモメのマルチトラップ（2003年7月25日）



船で鳥見に連れて行ってくれました
(2005年7月10日)

『鉄人』松ちゃんととの思い出
東洋大学 伊藤 元裕

2004年の3月末、私が卒業研究の調査のため初めて入島した天売島の港でお会いした Rey-Ban のサングラスをかけた寡黙で屈強な漢、それが青塚松寿さんでした。調査で入島した我々学生の荷物を無言で紺のハイラックスサーフに積み込み無言で走り去っていく姿に、恐怖を感じたのが最初の出会いでした。そのすぐ後に大量のカレイと灯油を届けてくれた時もほぼ無言。帰り際に「早く雪かきをせよ」と言い残していったぐらいだったような記憶があります。感謝しつつもとても緊張したこと覚えています。やっと松ちゃんと呼ばせてもらえるようになったのは、5月半ばになった頃だったでしょうか。その頃には、「シャイ」で、しかし、とにかく「優しく」、「誠実」で、時に「厳格」、「自然へ洞察」に極めて優れ、「腕っぷし」も尋常ではない『鉄人』松ちゃんの虜となっていました。

その後、天売島に入った際には、常にお世話になりました。調査では、崖づたいの尾根への侵入方法を教えていただいたり、

オオセグロカモメを罠で大量に捕まえていただいたり、モニタリングのために陸からアプローチできないウミウコロニーに船で連れて行ってもらったり、さまざまな機材をお貸しいただいたりとありとあらゆるご協力をいただきました。また、生活面でも、大量の海産物をいただいたり、珍鳥と一緒に見に行ったり、船で釣りをさせてもらったり、家でご飯をごちそうになったり、貴重な写真を見せてもらったりそれをプリントアウトしたりと楽しい時間をいただきました。2011年、私が北海道を離れて以降は、お会いできる機会は大幅に減ってしまいましたが、2-3ヶ月に1度程度の電話や年賀状などのやり取りは続き、早20年のお付き合いをさせていただくに至りました。

上で、シャイと書きましたが、松ちゃんは写真を撮られるのが大嫌い。今回の追悼文集には、まるで隠し撮りかのような写真が並ぶのではないかと予測しています。天売で調査をしてきた歴代の先輩からも松ちゃんにカメラを向けたら壊されるぞと脅されてきましたが、今となっては、カメラを壊される覚悟で写真をたくさん撮っておくべきであったと後悔しています。今回、一

一番いい写真を提供するのは、誰になるのでしょうか？私は、2010年代以降の女子学生が提供してくれるのでと予想しています。お気に入りの女子学生にはとにかく甘く、そんな娘がいる年には鳥研への滞在時間が有意に長くなる、そんな隠れた？特徴も持った愛すべき人でした。

私にとって、憧れ、お手本にしたくてとても到達できない、『優しき鉄人ナチュラリスト』、それが松ちゃんです。青塚松寿さんを失ったことは私個人としては勿論、日本の鳥類研究界にとっても大きな損失となりました。

2024年に久しぶりに天売島に調査に入ることができ、そこで松ちゃんと焼肉を囲み、夕方には一緒にトラフズクの写真を撮りに出かけられたのは今となっては本当に幸運であったなと思います。その頃から、電話で度々、風邪気味で調子が悪いというような話を聞くことが多かったのが気になっていたが、まさか、計報を聞くことになるとは思ってもいませんでした。私は現在カナダにおり、最後にお会いする機会すら逸してしまったこと、また、カナダで珍しい鳥の写真をたくさん撮ってこいと出発前いわれて撮りためていた写真、お土産として準備した鳥類図鑑をお渡しするのが叶わなかつたことが悔やまれます。これまで20年にわたり、本当にお世話になりました。ご冥福をお祈りします。

まっちゃんは天売で何を見てきたのか？

先崎 理之

2025年10月30日、まっちゃんこと青塚松寿さんがご逝去されました。まっちゃんと私のかかわりは綿貫研の関係者と比べると長い方ではありませんが、それでも、



兜岩付近を案内するまっちゃん



松丸を操船するまっちゃんと利尻山

まっちゃんには単に島での研究活動を支えて頂いたにとどまらず、親子ほど年齢が離れているにもかかわらず、私にとっては大事な鳥仲間として親しくさせて頂いておりました。また、ついぞ直接紹介できなかつた私の家族や、島と一緒に連れて行った友人たちにもいつも良くして頂いておりました。頂いた恩に対して、何もお返しできて

いないというのが正直なところですが、かけがえのない経験を与えてくれたまっちゃんには、本当に感謝の念に堪えません。

私がまっちゃんに最初に出会ったのは2011年4月でした。この年、私は綿貫研の卒論で天売に3か月滞在することが決まっており、それに向けて調査地のメンテナンスや島民への挨拶回りのために、4月半ばに1週間ほど海鳥研究室に滞在しました。その際、先輩に連れられてまっちゃんの自宅を訪問した際に対面したのが最初でした。

私は鳥屋で、先輩から「こいつは鳥屋だ」と紹介してもらったので、まっちゃんとは初対面時から専ら鳥の話をしていましたが、最初は得体のしれない奴が来たと少し警戒されていたかもしれません。それでも卒論以降も島に通ううちに、「一周するか?」の一言で、徒步では行きにくい島の周回道路を車で回って鳥を探しに連れて行ってくれたり、図々しくも滞在中は毎日のように昼食をごちそうになったり、ご自宅でまっちゃんの撮った鳥の写真を見て、識別や生態についてあーでもないこーでもないとお話ししたりするのが毎回の楽しみでした。また、まっちゃんから珍しい鳥がいたと教えてもらってから即渡島を決断して、どうしても宿が取れないときにはまっちゃんの家にこっそり何度も泊めて頂いたこともあります。

私はほかの綿貫研OBとは異なり、島での暮らしを通してまっちゃんと関わったのは最初の1年だけだったので、まっちゃんとはやはり島でいろんな鳥と一緒に探したり、なんてことない鳥話をしたりしたのが一番の思い出として残っています。書いておきたいことはたくさんありますが、まっちゃんから聞いた昔話を含めて天売の鳥にまつわるエピソードを少し綴りたいと思います。

■ 日本一(?) シロフクロウを見た男

北海道では滅多なことでは出会えない本種ですが、私にとっては長らく憧れの鳥でした。天売島では昔からシロフクロウが記録されていることは知っていたので、まっちゃんには天売のシロフクロウの話を秋冬に私が来島した際によく教えてもらっていました。2013年11月に天売に現れた際には電話をもらったもののどうしても行くことができず、「残念でしたー、はやくこねーからだべや」と言われてしまったのですが、2015年にサロベツで見れたことを報告したときには一言「へー」と感嘆するように言われたのをよく覚えています。まっちゃんは、私の自慢話に対して共感の言葉をかけてくれることはあまりないのですが、そんなときにはいつも嬉しそうに聞いてくれて、「へー」「ほー」と相槌を打って反応してくれました。なんとなく後ろに（よかったな）という言葉があるようないながら会話をしていました。天売でまっちゃんとシロフクロウを観察することはついぞ叶いませんでしたが、シロフクロウを求めて初冬の赤岩に昼夜問わず何度も連れて行ってもらったのを思い出します。

話を戻しますが、まっちゃんによれば、近年はシロフクロウの渡来がめっきり減ってしまったそうですが、80年代くらいまでは少ないながらもたまに来ていて、早いときには10月に、よく出現したのは12月だったと教えてもらいました。多い年には3羽が来ていて、赤岩から古灯台のあたりで見かけることが多かったそうです。雪で道が通れなくなるまでの間、バイク（原付？）で良く見に行っていたそうです。ただ、夕方遅くのあたりが暗くなってから出てくるので、写真は撮れなかったと話してくれました。かつては今よりも道内へのシロフクロウの渡来はあったようですが、それでも道内では幼少から鳥を見ていても一

生に1~2回、多くても5回くらい出会えれば御の字というのがこの種に対する私の認識です。私の知る限りでは、日本で最も多くの野生のシロフクロウに出会っていたのはまっちゃんだったと思っています。

■一緒に夜の（小型）フクロウの探索にハマる

まっちゃんはシロフクロウ以外にもフクロウの仲間（と猛禽類全般）は結構好きだったようで、いろいろと教えてもらっていました。私もトラフズクには特別思い入れがあったことから、季節を問わずにこの種（と秋冬にはコミミズクも）については、夜な夜な山に繰り出してよく一緒に探していました。ある年、一緒に見つけたトラフズクの巣の状況について電話で話していると「今日、一番小さいやつが下に落ちて死んでいた」と普段とは違う哀しそうな口調でしゃべっていたのが印象に残っています。野にいる鳥のことを本当に大切にしていたのだと思います。

また、まっちゃんとは10年くらい前から小型のフクロウの探索と一緒に？ハマったのも思い出されます。いつどこでコノハズクやオオコノハズクを見たのかといったことや、キンメフクロウはいけそうかということをワクワクしながら話したものです。2016年の冬には私の友人たちとまっちゃんとで夜中の森を歩き回って小型フクロウを探し回りました。今でこそオオコノハズク1羽に出会うのは造作もありませんが、真冬の天売の、まっちゃんおすすめのポイントでオオコノハズクに出会ったときの感動は今でも忘れることができません。コロナ禍以降はめっきり島に顔を出す機会が減ってしまい、電話でお話を聞きするのが主になってしまいましたが、9~10月に次々にオオコノハズクを観察・標識していく、渡りのオオコノハズクが結構いるら

しいことを明らかにして教えてくれましたし、オオコノハズクの家族群も何時所かで観察していたようです。

■迷鳥に好かれる

大陸からの迷鳥が島内全域で観察される天売島ですが、まっちゃんの家の周りはその中でもなぜか珍しい鳥の記録が多いスポットだったような気がしています。珍しい鳥の出現場所を聞くたびに、何度も聞いた単語として庭を指す「裏」とか「裏の方」というのがありました。中でも強烈に覚えているのが、2016年11月に「裏にコノドジロ（※コノドジロムシクイのこと）とチフ（※チフチャフのこと）がいた」というまっちゃんからの電話を受けて、翌日か翌々日に駆け付けたときのことです。島について一目散に現場（まっちゃんの家）に向かい一緒に探していると、これらの2種に加えてオオモズ、ヤマヒバリ、コホオアカ、ツメナガホオジロ、ユキホオジロが次々に現れ、まるで島の迷鳥がこぞってまっちゃんの家の周りに集まっているかのようでした。この時は、翌朝に連れて行ってもらった赤岩方面でケアシノスリの渡りのタイミングにあたって、さらに2年連続となるケアシノスリの暗色型成鳥を初認するなど記憶に残る天売行きでした。

■狙った鳥は逃さない

優秀な鳥類標識調査員として名を馳せていましたまっちゃんですが、迷鳥を狙って捕獲する技術にも長けていたように思われます。私がまっちゃんと出会ってからは車からクロハラアジサシをたも網でつかまえた話や、見つけたハイイロウソやコバシギンザンマシコをいとも簡単に？標識したという話が印象的です。迷鳥ではないですが、ウトウコロニーでタモ網を片手に次々とウトウを捕獲し、流れるように標識していく様にも

感動した覚えがあります。

また、私にとってコロナ禍前最後の来島となった2020年1月には、北海道初記録と思われるハシブトアカゲラを私が帰札後に一発捕獲して、計測値を得て識別の決定打としてくれたのが印象に残っています。まっちゃんから「論文になつたら教えてくれ」と言っていたにもかかわらず、この記録は未だに論文化していないのを大いに反省しています。この記録はまっちゃんとの共著でいつか必ず発表したいと思ってます。

■ まっちゃんは天売でどんな鳥を見ていたのか

今年の秋に「まっちゃんの体調が悪い」と聞いて心配はしていましたし、秋の渡り時期に差し掛かるのに電話がこないことを気にはしていましたが、6月ころまでは通話時の声は以前と変わりなく、その前年?に札幌でお会いしたときにも様子は全く変わっていました。また、鉄人のようなまっちゃんだからと、いつでも天売に行けば元気な姿で一緒に鳥見を出来ることを信じて疑わず、まっちゃんのことだから体調のことを聞かれるのは嫌だろうと思い、大事には捉えていませんでした。私と家族にも定期的にいつも贈り物を頂いていましたし、お返しの菓子折りを持って、鳥もよさそうな11月上旬頃にそろそろ会いに行こうかなと、この秋の久しぶりの天売行きを計画していた中で、想像以上に体調が悪いと聞き、私が取り乱しているときに電話をくれた際にはもう話すのもつらそうな状況でした。

2025年10月21日、私はとんぼ返りの天売からの船でまっちゃんと一緒に羽幌に向かいました。電話で伝えられていた通り、まっちゃんの姉さんと吉川まーぼさんから、まっちゃんが撮った写真が入った

PCを預かり、船の中で一緒に眺めました。小一時間ばかり、これまで通りの会話を出来たのは私にとってはせめてもの救いでし
た。「帰ってから、ゆっくり見れー」という言葉が印象に残っています。もう話すのは難しいと言われていましたが、10月24日に電話をくれて一言だけ声を聞くことができたのが最後となりました。

まっちゃんの訃報に触れてから、預かったPCに保存された写真をじっくり眺めています。フィルム時代のものは、恐らく伊藤元裕さんらがスキャンしたものが一部入っているのみでしたが、主に2006年からデジタルカメラで撮影した写真をまとめて私に託してくれたようです。最後の鳥の写真は2025年6月22日の天売港か前浜港のコサギで、その直前には夏には珍しいカモメの第一回夏羽と、電話でも聞いていた白変のウトウを写していました。ファイルの中には、これまで私と一緒に見てきたなつかしい鳥たち、私は見れなかっただけまっちゃんから話を聞いていた鳥たち、識別依頼を受けた鳥たちなど私が関わってきた鳥だけでなく、普段の生活でまっちゃんを取り囲んでいた数々の迷鳥を含む、よく解像した膨大な鳥たちの写真が残されていました。どれもまっちゃんが、普段からどんな鳥をどんなアプローチで観察して、撮影していたのかがわかる素晴らしい写真です。思い返すとまっちゃんは、あまり自分が撮った写真を世に出すことも良く思っていなかったように思います。ただ、今回ばかりは「好きに使ってくれ」という一言を私に言い残してくれました。このままにしておくにはもったいない写真の数々なので、まっちゃんが天売で見てきた鳥たちをどのように世に伝えていくべきかを、ご家族や綿貫研の関係者に今後じっくりと相談していきたいと思っています。

まっちゃん、ありがとうございました
大門 純平

私が青塚松寿さんを初めて知ったのは、学部4年の春、天売島に行く前の打ち合わせのときでした。天売海鳥研究室の調査マニュアルには、島での生活に関するさまざまな注意点が書かれており、その中に毎年調査でお世話になっている「青塚さん（通称まっちゃん）」のことも紹介されていました。実際にお会いしたまっちゃん（親しみを込めて本原稿でもそう呼ばせていただきます）は、言葉数は多くありませんが、ときおり学生をからかってはニコニコ笑っていて、天売島とそこで暮らす鳥たちへの深い愛情にあふれた方でした。私自身もまっちゃんと話す中で、自然と天売島での生活になじめた記憶があります。不思議なことに、まっちゃんの前では、大学や研究機関の先生方までもが、まるで学生に戻ったようで、からかわれて少し照れながら、で

もどこかうれしそうに話していました。その様子を見て、まっちゃんが天売海鳥研究室を長年にわたって陰で支えてくださった「同志」であることを実感しました。

まっちゃんのやさしさは、なんといってもその自然さにあります。ふらっと遊びに来るように、私たちの様子を見に来てくださいり、困っていることを伝えれば、さりげなく、でも必ず助けてくれる、そんな頼もしい存在でした。私自身も、7年にわたって天売島でお世話になった中で、まっちゃんのやさしさに何度も救われ、気づけば、先生や先輩方と同じように、まっちゃんに深い信頼と安心感を感じるようになっていました。正直にいうと、「不死身」と思っていたまっちゃんが天売島にもういない、ということは今でも信じられません。でも、もし天売でバーベキューをするときがあったら、また空の上から遊びに来てください。ガラナを用意して、待っています。本当にありがとうございました。

偉大なるバンダー、まっちゃんを偲んで
庄子 晶子

私がまっちゃんと青塚松寿さんに初めてお会いしたのは、2016年の春のことでした。十年以上の海外生活から帰国したばかりで、憧れだった天売島で調査できることが本当にうれしかったのを覚えています。北大の学生さんたちに連れられて初めて青塚家を訪れたとき、まっちゃんと青塚洋子さん（ねえさん）が話してくださいました島の自然や鳥のこと、そして初対面とは思えないほどの温かさが心に残り、その時のことを見てもよく覚えています。それ以降、天売島に向かうたびに、いつも変わらない笑

顔で迎えてくださいり、お二人に会えることが天売島へ行く楽しみになっていました。

まっちゃんは、長年にわたり島の鳥類調査を支えてこられた名バンダーで、天売の自然について本当に幅広くご存じでした。現在の様子だけでなく、昔の海岸線や鳥たちの動きまで、生き生きと語ってくださるお話をうかがうたびに、天売という島の魅力をあらためて感じたものです。

そして、まっちゃんはいつも誰に対しても笑顔で、どんな話題でも気さくに応じてくださる方でした。調査の後に交わす何気ない会話や、ちょっとした出来事を笑い合った時間は、振り返ればどれも楽しく、天売で過ごした日々の大切な一部になっています。調査がうまく進まず戸惑っていたと

きには、まっちゃんがさりげなく声をかけてくださり、いくつもの案を出してくださったり、罠を貸してくださったり、一緒に現場へ行ってくださったりしました。その心強さは今でも忘れられず、あの時いただいた励ましが、私が前に進む大きな支えになりました。

振り返ると、まっちゃんと過ごした時間

からは、技術や知識だけでなく、自然への向き合い方や現場での姿勢について、さまざまなことを教えていただきました。まっちゃん、本当にありがとうございました。今はどこか静かな場所で、好きな鳥たちとゆっくり過ごされているといいなと思っています。どうか安らかにおやすみください。

天売島調査での恩

中嶋 千夏

2021年に天売島へ調査に訪れた際、青塚さん（まっちゃん）に出会いました。当時私は修士1年生で、初めての野外調査でとても緊張していたのを覚えています。その中で、まっちゃんが鳥を見に連れて行ってくれたり、様子を見に来てくれたりして、まっちゃんのおかげで天売島での楽しい思い出が増えました。また、調査の終盤で私が車の事故を起こしてしまったことがありました。車の事故自体は非常に反省するとの多い出来事だったのですが、この時まっちゃんがすぐに現場へ駆けつけてくれて、

車を引き上げてくれて、事故処理をお手伝いくださいました島民の方へのお礼周りにまで一緒に歩いてきてくださり、最後までそばについていてくれたこと、私は一生忘れません。2ヶ月くらいしか滞在していなかった私ですが、そんな学生にも親身になって励まして、助けてくれたこと、ずっとずっと感謝しています。天売島は初めての野外調査でしたが、私もまっちゃんのようにどんな人にも手を差し伸べられるような、素敵なお人でありたいと心に刻んで帰路に着いたのを今でも覚えています。本当にありがとうございました。心よりご冥福をお祈りいたします。

天売島のまっちゃんを偲んで

大島 康平

天売島の野外調査で大変お世話になったまっちゃん。突然の訃報に接し、深い悲しみとともに、重い喪失感を覚えています。まっちゃんは天売島の自然を心から愛し、その魅力や奥深さを、訪れる私たちに伝えてくれました。

まっちゃんからは、本当に多くのことを教わりました。海鳥研究に関する助言だけでなく、島での生活をどう楽しみ、どう大

切にするかという姿勢までも、まっちゃんは言葉とふるまいの両方で示してくれました。調査の合間の雑談や、夕食後の一服の時間、そんな何気ないひとときに交わされた言葉の数々は、長く天売を見つめてきたまっちゃんだからこそその重みがあり、今思えばどれも心に沁みるものでした。

とりわけ忘れないのは、趣味のバードウォッチングの話で何度も盛り上がったことです。私が時期外れのマミジロキビタキを見つけたとき、「よく見つけたな」と笑顔で褒めてくださったあの瞬間の嬉しさは、今でも鮮明に残っています。

「また島に来ます！」と約束したのに、結局一度もお会いできないままになってしまったことが、今ではただ悔やまれてなりません。もう一度まっちゃんと野鳥の話や研究の話、何気ない世間話をしたかった。それでも、まっちゃんが愛した天売島の風景の中には、まっちゃんの姿勢や言葉がこれからも確かに息づいていると感じています。

青塚さんとの思い出 松本 和也

青塚さんのご靈前に、心からの哀悼の辞を捧げます。

私は2022, 2023年の夏期に、海鳥の研究で天売島にお邪魔しておりましたが、本当にお世話になりました。初めてご挨拶にお伺いしたときから、いつも快く接してくださり、野鳥やプライベート、競馬などのお話をたくさんしたり、バーベキューにご一緒させていただいたりと、共に過ごした時間は本当に楽しかったです。競馬談議をしたおかげで、大的中させていただいたこともありますたっけ(笑)。

そんな楽しかった思い出もたくさんあり

す。あの島に再び足を運んだとき、海鳥たちの声や波の音が、まっちゃんが遺してくれた記憶を呼び起こしてくれることでしょう。

青塚松寿さんのご冥福を、心よりお祈り申し上げます。

まっちゃん、本当にありがとうございました。

ましたが、その他にも天売島での研究生活では本当に支えられていたなと思っております。日常生活の中でのアドバイスや海産物のお裾分け、そして何よりも、夏期とはいえ冷え込む日が多い中、寒そうな恰好をして調査に励んでいた私にネックウォーマーをくださったことは今でも忘れられません。首元が温まるだけでなく、その優しさから心も温まりました。

青塚さんに支えられて達成した研究や天売島での生活を経て、今現在も仕事として研究を続けることができ、経験を発揮しております。今現在もこの先も、温もりに満ちた思い出たちが私の心から消えることはございません。どうぞ安らかなご冥福をお祈り致します。

松ちゃんとの思い出 富士元 寿彦

青塚松寿さんとの最初の出会いは、確か1980年6月だったと記憶しています。

初めから図々しく「松ちゃん」と呼び、色々と聞かせていただいた天売の自然、特に海鳥の話は実に興味深いものでした。現在はもう死語になったようですが、当時は「ナチュラリスト」と呼ばれていた部類の一人だったと思います。

松っちゃんとの一番の思い出は、ウミネ

コのコロニーを案内してもらった時の糞害です。何故か?コロニー内に踏み入ると、私が集中して糞攻撃に合うのでした。最初は多くの数が乱舞するので、たまたま糞が飛んでくるかと思ったのですが、どうも違うようです。見ているとしっかり狙いをつけて近距離からの発射なので、これはモビングの一つだと憤慨したものです。ウミネコから見ると、私は捕食者に見られていたようですが、後々までのお笑い種になっています。

もう一つ興味深く聞いたのが、トラフズ

クの地上巣で、毎年地上で産卵育雛しているというのです。何年か後にこちらでも笹藪の中で巣したものがいました。松っちゃんの話を時々思い出しながら夜を過ごしたものでした。その後も夜の動物たちの撮影が多くなり、海鳥たちとの距離は遠ざか

さようなら青塚さん… 有田 智彦

今年の9月3日、病んでつらそうな青塚さんを助手席に乗せ、これで二度目の旭川日赤病院へ走る。もしや、前回受診の時と同じように再び入院かもと思って待っていたら意外に早く診療が終わって、すぐ羽幌に帰ろうと言う。付き添いで旭川に住んでいるという青塚さんの妹さんが、「いつもすみません」と恐縮そうに言って病院の玄関で一人見送ってくれた。帰路、ぽつんと青塚さんが言う。「もう、これで日赤での診察は最後だ。これ以上の通院を断った」

「え～、本当にそれでいいの？…」その時の青塚さんは自分がもう長く生きられないと覚悟したなと思われ、それからは青塚さんにどう慰めや励みの言葉をかけていいのか車中で交わす会話も余りなく暗然たる思いで羽幌に。翌日のフェリーで多くの島民が気にかけているだろう天売島へ帰って行った。

その後、海も荒ってきた風寒い10月。フェリーで島から急患扱いで来るという急な知らせ。おそらく青塚さんの顔を見るのはこの時最後だろうと港でフェリーの入港を待つ。急報を聞いて北大の綿貫先生ら海鳥研究者も待機していた。そしてすっかり痩せて担架で救急車に運ばれるごくわずかな時間に面会を果たせた。間もなく、入院先の道立羽幌病院で11月を待たずに青塚さんはあっけなく逝ってしまった。

る一方で、松ちゃんとも会えずにいました。

もう一度ゆっくりと話をしたかったです。黄泉の国へと旅立たれたのですね・・・。

心よりご冥福をお祈りしております。



※ ↑2023年5月の半ば、青塚さんが島内の「秘密の場所」に一枚だけ張った12メートル網にかかったアオバズク。その個体に市販のラジオペンチで器用に7番の標識リングを付けている。「標識ペンチどうしたの？僕のを貸してやるから付ければいいっしょ」と言うとバンダーが日常使っている標識専用ペンチは青塚さんも持ってはいるがほとんど使ったことがなく今まで鳥にリングを付けてきたのは全部このラジオペンチだと言うので驚いてしまう。でもけっこう面白い種が掛かるという一枚網場の秘密場所は実は僕も知っていて今後は僕が有効に使わしてもらいます。（^）!

思えば遡ること1990年、絶滅寸前だったウミガラスの増殖保護対策事業が開始され、その誘致作戦で繁殖岩場に初めてウミガラステコイの設置が始まった。その繁殖場所は、海上に大きな壁のようにそそり立つ「屏風岩」標高40メートル。ここに

24個のデコイ設置作業班として、僕達クライマー組と青塚さんが登頂に挑んだ。そして一日中、削岩機で穴をあけデコイの取付け作業に汗した時のことを見かしく思い出す。当時の青塚さんもまだ若く、登る時は脆い岩もあるので恐る恐る慎重に登る僕達に比べ、青塚さんが登った時の様子は、かつて断崖が連なる辺り一帯は彼が子ども時代から登ったりして遊んでいた岩場の気安さもあってか、大した苦もなくすいすい登りきって頂上で涼しい顔。その様を見て僕達も「すごい人だな。ターザンみたいだ…」尊敬の眼差しでした。土木作業はお手のものとする青塚さんが作業に加わると、取り付け作業も随分はかどった。

一方、青塚さんは1977年から山階鳥類研究所が行う鳥類標識調査の従事者の肩書を持つ。それは島の海鳥に標識を付けるという国内でも数少ないバンダーとして長

らく従事していた事は多くの海鳥研究者達も周知のとおりだ。鳥類標識バンダーは山階鳥研が実施する講習会等や実習を経て認められて初めて鳥に標識を付けるバンダーになるのだけれど、なんせ1977年当時北海道内はもちろん、全国でもごく少数のバンダーしかいなかった時代。戦前から国内でも有数の海鳥繁殖地として知られていた天売島に山階鳥研が初めて海鳥の標識調査に入った時、地元組として青塚さんがその調査を手伝ったのを機にそれで離島の強みで即バンダーとなった人だ。自分が根室風蓮湖での講習会を経て1993年から山階鳥研バンダーになり、長年焼尻島で調査をやっていた際にも隣の天売島の渡り状況の情報など時々交わしていたのですが…。大先輩として青塚さんとはもっともっと鳥の話をしたかったなあ。

マツとの思い出

齊藤暢

私は天売島で生まれ育ち、小学校3年生の時に当時担任で現在は写真家として活躍されている寺沢孝毅氏に影響を受け野鳥観察が趣味となりました。

ご存じのように天売島はウミガラスをはじめ海鳥の繁殖地として知られ、また渡り鳥の中継地としてバーダーにとって聖地のような場所で私は生まれ育ちました。

寺沢先生の影響で始めた野鳥観察ですが天売島にはもう一人凄い鳥に詳しい人がいて、いつも肩に望遠レンズを担ぎながらオフロードバイクに跨り急斜面も難なく走っていくすごい人、それがマツこと青塚松寿さんでした。

青塚さんとは親子ほど年齢は離れているのですが、子供のころから愛称の「マツ」

と呼んでいました。

マツは島の人たちからも「鉄人」と呼ばれる程体力や視力が優れている逸話があり、

一つには昔漁協青年部の活動でダイビングでのアワビ漁をしていたらほかの人たちは30分でタンクが空になるのにマツは倍近く潜ってるとか、バフンウニ漁をすれば他の人が見えない海藻に隠れているウニを見つけるのでバフンウニ漁はマツが一番採るとか、

または100mはある断崖の上で作業していたらマツがタコを見つけたそうなんですがほかの人には見えるはずもなく「見えるわけないべ」と言われたマツは崖を下ってタコを捕まえまた崖を駆け上がってきた、などマツの鉄人伝説は他にも多数あるわけです。

その鉄人級の視力は鳥を見つけるのにも

威力を発揮し今までどれだけの数の珍鳥を見つけては連絡くれて見ることができたかわかりません。

早朝にマツツから着信があった時は何か面白いの出たんだと興奮したものです。

今年5月早朝、マツツから「ハシグロビタキいるぞ」と電話をもらい二人で朝からあっちだこっちだと探したのが一緒に鳥を

見た最後になりました。

マツツには鳥のことだけではなく植物や釣りの事、島の歴史など沢山のことを学ばせていただきました。

不便の多い島での生活を豊かにするのは楽しむ術を知ることだと思います。

沢山の豊かに暮らす術を教えてくれてありがとうございます、マツツ！

青塚さんのこと

岩澤 光子

天売島にフェリーが着くと、青塚さんがターミナルの前に立っている。「あれ、今日は青塚さん居ないな」と思うと、環境省の事務所の周りで何か仕事をしている。そこでも会えないときは、森の中を歩いている私たちの後ろに、いつのまにか青塚さんの車が静かに付いてきている。それが青塚さん流の歓迎の挨拶。○○に○○が咲いている。○○に○○が居る。などその時に一番ホットな自然情報を教えてくれ、案内してくれました。青塚さんのおかげで出会えた花や鳥はたくさん居ます。

青塚さんが売店横で展示していた「野鳥写真展」は、その殆どが珍鳥で、まるで「珍鳥写真展」だねと言うと、「当たり前

だ」って顔をしていました。

天売島の住民は余り山菜を食べないのか、タラノメもワラビもウドも取り放題です。青塚さんが言うには、天売の住民に好まれてる山菜があり、それは粘りが強くて独特の味がする〇〇いもと言うものらしい。青塚さんが葉付きのいもを一株わざわざ持ってきて見せてくれました。何とそれはサイハイランの球根でした。食べるわけにも捨てるわけにもいかず、どこででも育つ花ではないので、羽幌の防風林のサイハイランの葉があるところに移植しました。

たまにしか来島しない私にさえ、いつも優しかった青塚さん。次の春にもう会えないと思うと寂しいです。青塚さんがくれたサイハイランが羽幌の防風林の中で咲いてたら、少し嬉しいです。

いつも見守ってくれていた青塚さん

長谷部 真

青塚松寿（まっちゃん）さんに初めて会ったのは2007年の7月でした。「なんでもできるスーパーマンなんだ」当時羽幌自然保護官だった新村靖さんの紹介の言葉でした。天売島の鳥獣保護区管理棟の椅子に座ると窓から見える景色や島に流れている

昭和な感じの空気が気に入り、その1年半後から海鳥センターに勤務し、天売島に来るようになりました。僕は天売島に通いで泊っていただけで住んでいないので島にどっぷりつかった訳ではないですが、コンビニはなく、昔ながらの商店があり、車があり走っていない島は本土とは別世界でした。青塚さんは宿舎にしていた天売島鳥獣保護区管理棟を宿舎の勝手口をがらっと開けて入ってきて、よく話をして帰っていました。

ました。「おまえ、今日何してた。さぼってただろ、寝てたのか。」ところで、ぼくは「まっちゃん」と呼ぶのはあまりにかわいらしすぎて好きではありませんでした。特に本人に対して呼ぶには恐れ多い気がして、姉さんに「まっちゃんいますか」というのはいいですが、僕は他の人に話題にするときはだいたい「青塚さん」と呼んでいました。

天売島に行くと船を出してくれる萬谷良佳さんと海鳥に詳しい青塚さんのところに挨拶に行きました。青塚さんが環境省のウミガラス事業を手伝ってくれたのは基本機材設置のときだけでした。黒崎海岸から赤岩まで片道50分くらいかけてゴロゴロと動く岩の上を歩いて荷物を運ぶことがよくあったのですが、たまに一緒に行くと決まって置いて行かれました。「お前らにやらせたら日が暮れる。」といつもの調子です。赤岩の根元でのウミガラスの音声装置やウミガラスのビデオカメラ機材設置する架台を設置できたのも青塚さんのおかげでした。ビデオカメラにつながるケーブルを回収するのに僕たちでは登れない崖をひょいひょいと登りあつという間に杭を打ち込んでくれました。岩登りもする有田智彦さんは青塚さんことを「忍者みたいな人だ」と評していました。



とび職のように架台を設置する青塚さん

2013年4月30日

ウミガラスのことを聞いても、ケイマフリのことを聞いても、ウミスズメのことを聞いても「さあ、どうでしょう、自分で探してみたら」とあまり教えてくれることはありませんでした。ようやく自力で見つけて誇らしげに報告すると「お前に見つかるとみんないなくなるからな。」と取り合ってもらえませんでした。



崖を忍者のように登る青塚さん

そういうながら、僕がウミガラス・ケイマフリ・ウミスズメ調査などに行ったときも「お前今日あのあたりでちょろちょろしていたな、どこでも歩くから危ねえんだ。」心配してくれていたようです。目が非常によく、双眼鏡を持っていました。観音崎の展望台からタコを見つけ、斜面を駆け下り捕まえたという伝説があるようです。ある時、夕方に赤岩でウミガラス調査をしていると珍しく船に乗った青塚さんが現れました。「ウミガラスはどうだ？」としばらくその日の状況の話をしていると、「じゃあな、がんばれよ」と船に乗せてく

れることもなく去っていきました・・・。ウミガラスの巣立ちの季節に真っ暗になってから調査を終えて帰って来ると遠くに見える黒崎の駐車場にハイラックスが止っているのが見え、こちらが帰ってくるのを確認したのかすっと去っていました。



まともに撮れた唯一の写真 2012年7月17日 いつもの青いつなぎ。

青塚さんは携帯電話を持っていなかったので（実は持っていたらしい、姉さんには秘密だと言われていた）、家に電話をかけると姉さん（洋子さん）が出てきて「ま（まっちゃん）は山に行った」、「港に行った」、「海にいった（船を出して乗っていった」と神出鬼没あまり家にいません。不在の場合に玄関前で姉さんと立ち話をしているといつの間に「おう、来ていたのか、さぼっていないで仕事しろ」とハイラックスに乗って帰って来ることもありました。あるときは家に行くと姉さんが出てきました「鳥研（天売海鳥研究室）の人たちと海に行ったよ、すぐ来ないからよ。お前来るの遅いもん」。赤岩に向かう船を羨ましく眺めていました。自分が乗せてもらえないことをぼやくと姉さんは「そりゃお前とは違うよ。せっかく遠くから来てくれたんだ

からあ。」よく考えてみると青塚さんの船に乗せてもらったのは海鳥センターにいた6年間で3回くらいしかない気がします。しかし、妻の女友達が遊びに来た時だけは別でさくっと船に乗ってくれたのをはっきりと覚えています。自分だけでは「よっか（萬谷良佳さん）に乗せてもらえ」と決して乗せてくれないので・・・。今思えば、環境省を相手に仕事をしているよっかさんの気を遣っていたんだなあと思います。

家に行ったときに「お前暇か。ちょっと手伝え」姉さんに言われ、とササの子の皮むきやウニの中身を出す、ホタテの実を出すこともありました。うまくできずにいると「下手くそだなー、お前。ボロボロにしやがって。」漁師だけあってまっちゃんも姉さんも魚をさばくのが非常に速いです。海鳥研究室の学生さんはひと夏天売に滞在すると魚をさばけるようになって帰っていくそうです。ただ青塚さんはアイヌネギだけは嫌いみたいで、持っていくと怒られました。

たまに海鳥センターにひょっこり現れました。なぜかいつも手にはケーキが入った箱がぶら下がっていました。島から突然電話がかかって来ることもありました。「お前力二食べるか。ソイ食べるか。海鳥センターの人たちとも分けろよー。」しばらくするとダンボールでどっさりズワイガニや魚が送られてきました。

サロベツに引っ越ししてからは何度かウミスズメやドブネズミの調査、日本野鳥の会道北支部の総会で天売島に行くことはありましたが、それ以降行く機会がありませんでした。そういえば一度サロベツに来てくれたこともありました。何も連絡なく「お前ケチだからなー。来ないからよ」とにこにこしながら現れました。

2024年5月に日本野鳥の会道北支部で総会を天売島でやることになりました。残

念なことに船が欠航し、天売島での総会は羽幌に振替となりました。電話をかけると「来なくてよかったなー。時化ててひどかったぞ。」といつもの調子でした。春に札幌に引っ越したら休日も増えるので天売に行けるかもと期待していましたが、結局行けませんでした。夏が過ぎそろそろ連絡をしないと思っていたところ、有田智彦さんから「青塚さんのこと聞いたか、明日旭川の病院に連れて行くんだ」と連絡がありました。病状はよくわからないとのことでした。電話をかけるといつもならどんな鳥いたかとかそういう話になるのに、冗談ぽく「まだ、生きてるよー」とこの時はあまり話をしたくなさそうすぐに話は終わってしまいました。これが青塚さんとの最後の会話でした。そういえば、2024年の冬頃電話したとき「もう体弱くてダメだー」としきりに言っていたのを思い出しました。何度か聞いた話だったので、元気な姿しか見たことがないので、いつものことだろうと気にしていました。

天売島にいるとき海岸に漂着しているたくさんの昆布が気になっていました。「これ食べられますか」と青塚さんに聞くと、「干せば食べられるから、自分で拾って干してこい。」と言われたので、自分で岩場の上に昆布を置いて干していました。もうコンブ漁している人はいないけど、漁業権は青塚さんが持っているから大丈夫のこと。僕はそれから天売の昆布がすっかり気に入ってしまい、サロベツに引っ越してからも青塚さんに昆布をお願いして我が家ではずっと「天売昆布」を使っています。ほかのだしは使っていません。「お前そんなケチケチしないで昆布くらい買え。」と言われましたが、「僕は天売の昆布を食べた

いのです、売っていないし。」となんとかお願いしていました。その話を聞きつけた福田佳弘さんから「まっちゃんに昆布捕らせておるんだってな。ひどいやつだな、お前」と言わっていました。残念ながら、もうまっちゃんから昆布をもらうことはできません。これからはまっちゃんからいただいた残った昆布を天売を思い出しながら、大切に噛みしめています。来年にでもにこにこしながら港の前で待っているまっちゃんの姿を思い出しながら天売に行きたいです。



まっちゃんから頂いた天売昆布 こぶりだが出汁にもいいし、食べてもおいしい。出汁にとった後の昆布も食べている。細長いので使いやすいうようにハサミで切って保管している。

天売島の海鳥関係者が集う交流拠点

松井 晋

私が環境省アクティングレンジャーとして天売島での海鳥調査に携わった2015～2016年度の2年間、青塚松寿さんには大変お世話になりました。天売島では環境省の活動に日頃より協力してもらっている島の方々にお会いする機会も多かったのですが、当時の自然保護官の竹中康進さんと島で最初にご挨拶に伺ったのが、数々の伝説をもつという噂を聞いていた青塚さんのところでした。Ray-Banのサングラスをかけて、ハイラックスサーフから降りてきたレジェンドの登場に、最初は少し焦りましたが、怖い人ではなくて安心しました。皆から松ちゃんと呼ばれて親しまれていた青塚さんの家は、天売島で海鳥について調査する海鳥研究者や環境省スタッフがいつも集まってきて情報交換できる交流拠点のような場になっており、私も天売島で調査するときには、毎日顔を出していました。環境省の活動に対して、松ちゃん姉さん（青塚さんのお姉さん）からはいつも多角的な視点からのツッコミがあり、それに回答するためにあれこれ悩んでいると、青塚さんがその時々の状況にあわせて島の地形、危ない場所、天気などの安全管理上の注意点を丁寧に教えてくれました。

鳥類標識調査者（バンダー）でもある青塚さんは、愛車サーフの窓から望遠レンズのついたNikonのカメラを構えて、天売島に飛来した珍しい鳥をいつも撮影していました。私が天売島に行くたびに、それらの写真をみせてくれました。珍鳥の種名がわかるだけでは飽き足らず、「亜種が違うと思うんだがわかるか？」などの難しい質問をしてくることが多く、私は「先崎理之さんに訊いてみるとよいのではないでしょう

か」などと回答して、いつもお茶を濁しておりました。青塚さんにはインドガンやオウチュウが観察できる場所を案内してもらったり、トラフズクの巣立ち雛が活動している場所やヤマシギの営巣場所について情報提供してもらったりしたこともありました。2017年2月にフェリー航路の海鳥センサスで私が島にはいったときには、冬の天売島を案内してくれました。もしかしたら新しく購入したスノーシューを試してみたかったのかもしれません、年不相応に歩くペースがとても速くて、ついていくのが大変でした。厳冬期の海鳥繁殖地は風と波の音だけが響いており、春になると渡ってくる無数に海鳥たちを静かに待っているかのようでした（写真1）。

私は2015年度から羽幌町にある北海道海鳥センター（環境省羽幌自然保護管事務所）に勤務して前任の長谷部真さんから海鳥調査を引き継ぎ、2017年度からは後任の岩原真利さんにその調査を引き継いだので、短期間しか天売島での調査に携わっていません。ただ、この期間に私がこれまで研究してきた陸鳥とは全く異なる海鳥の世界を観て、知ることができました。青塚さんは不慣れなまま天売島で海鳥調査を開始することになった私のような立場の者でも、自然体で受け入れていただき、落石リスクのある場所でのウミガラス誘引のための音声装置設置作業や、天候によっては安全な実施が困難になる夜間の海上でのウミスズメ調査などに対して、いつも安全に実施できるように的確にアドバイスしてくれました。これまで頂いた数々の助言に感謝し、心に留めつつ、日頃のフィールド調査では、青塚さんに天国から「おまえ何やってんだ」と注意されないように、今後もフィールドワークでの安全管理に努めたいと思います。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

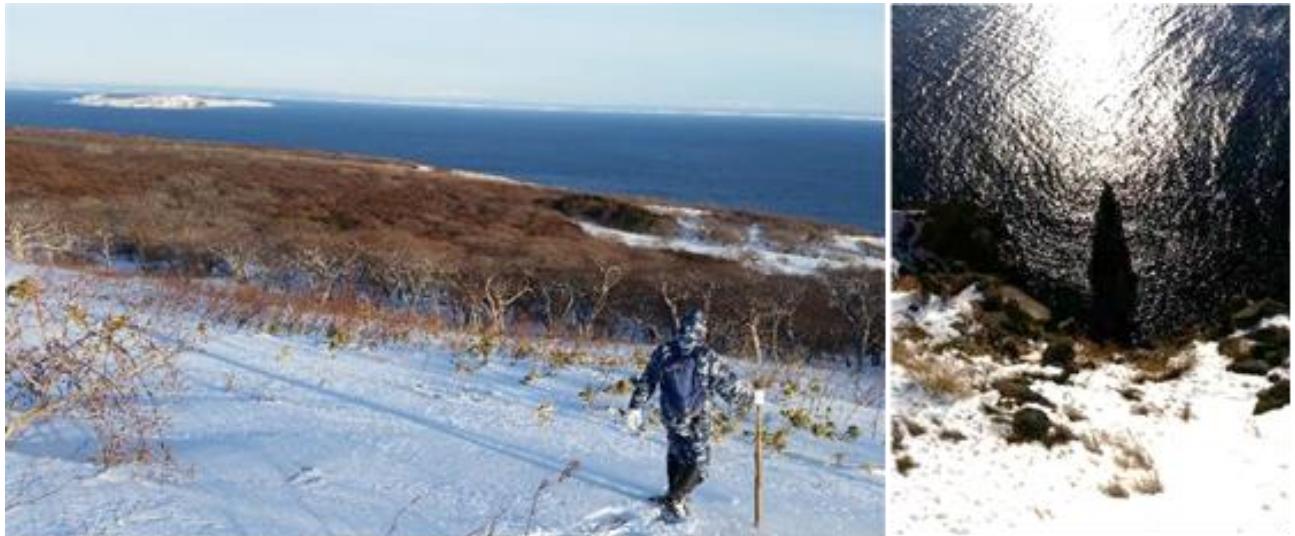


写真1. 2017年2月10日 左) 冬の天売島で雪上を年不相応に軽快に歩く青塚さん(左上に見えるのは焼尻島), 右) 厳冬期の赤岩.

青塚さん追悼

木内 裕也

青塚さんとは、羽幌に来てから8年ほどのお付き合いでした。特に私が天売島での勤務となり、島に住んでいた期間は、一緒に渡島した妻ともどもお世話になりました。島にいたときには、よく鳥を探して朝散歩したりしましたが、歩いていると大体どこかでパトロール中の青塚さんに遭遇するので、鳥の出現情報を教えてもらったりしました。いつも教えてもらってばかりなので、あまり見慣れない鳥を見つけたときには青塚さんに意気揚々と報告するわけですが、大抵は青塚さんがとっくに見つけていたり、何なら私の家の近くにいたのを教えてもらうことさえありました。そういうときはちょっと悔しいですが、島のあちこちで青塚

さんと会うたびにそんなやり取りをしていましたが、とても楽しい思い出となりました。初めのうちはなかなか聞き取れなかった青塚さんのあの訛りのある話し方、もう聞けなくなってしまったのが名残惜しいです。天売では数々の貴重な体験をさせてもらい、青塚さんにはとても感謝しています。本当にありがとうございました。



望遠カメラで鳥を探す青塚さん

青塚さんとの思い出

矢萩 樹

青塚松寿さんと私の関係は、それほど古いものではありません。青塚さんとお話しするようになったのも、私が大学生だった

2016年の頃です。この特集号でのほかの記事に比べると内容が酷く薄いかもしれません、少しばかりの思い出があるので綴りたいと思います。

青塚さんも私も羽幌町の者ですが、本土側の羽幌と島の人の交流は、それほど多く

はどのように思えます。そもそも、羽幌の人は島に行くこと自体が少なく、あったとしてもその多くは仕事で行く程度でしょう。先日テレビ番組で、静岡県民は富士山に登らないという話題を見ましたが、それと似たようなことなのでしょうか。それはさておき、私は高校生までを羽幌で過ごしましたが、中・高は部活動に明け暮れ、鳥に熱中していた小学生の頃も、島へは年に1回のイベントを通じて行く程度で、この頃に青塚さんとの面識はありませんでした。

2016年に青塚さんとお会いすることになったのは、私が参加した環境省のウミズメ調査のこと。当時、自然保護専門員であった松井晋氏に連れられ、青塚さんのご自宅を訪ねました。初めて青塚家を訪問しましたが、海鳥研究室の方たちも一緒に居て非常にウェルカムな雰囲気でした。主に姉さん（青塚さんのお姉さん）との会話に、青塚さんがたまに入ってくる感じで、話も色々と盛り上りました。鳥の話よりも、彼女はいるのか、羽幌のあの人は親戚だ、知り合いだなど話題が中心でしたが。この調査期間に、青塚さんのストック写真を見せてもらったり、一緒に鳥を見たり、ホタテの稚貝を剥いたりしました。

天壳島の超人、青塚さん 岩原 真利

私が青塚さんに出会ったのは今から9年前で、仕事で島に行った時が初めてでした。

最初はあまりしゃべらない少し物静かな印象でしたが、島に行くたびにターミナルには荷物の仕分けのために青塚さんが必ずいて、「今日は何しに来たんだ」と気さくに声をかけてくれました。

青塚さんは20代の頃から島ずっと鳥を見続けていることもあり、島で鳥の調査・研究をする人や、鳥を探しに来る人で

それから何度か、青塚さんが買い出しで羽幌に出てきた時やこちらが島に遊びに行った時に顔を合わせました。2025年9月にも青塚さんが羽幌に来ていた、白いウトウがいた、ノスリの雛に標識したなど、天売の鳥の話を色々と聞きました。また、私はこの時期に秋の渡り鳥を対象に標識調査をしていますが、あまり鳥が捕獲されないことをぼやくと、「鳥居ねえとこに網掛けんだけベヤ」と一蹴されました。この時の青塚さんは痩せて体がひとり以上小さくなっており、声にも力がないように思いました。

その後、羽幌の有田智彦氏から、青塚さんが病気で通院していることを知らされました。それからまもなく今回の訃報を受け、9月にお話しした日が青塚さんと会った最後の日となりました。こんなにも早い別れになるとは思ってもみなく、今思えば9月に会った時に、もっと話しておきたかったと後悔しています。私は青塚さんのようなスーパーマンにはなれませんが、彼のように自分の住む地域を深く理解している存在になりたいものです。青塚さん、ありがとう！

青塚さんを知らない人はいないのではないかと思うほど皆から慕われていたように思います。

島内の鳥を車で見て周ったり、森の中を歩いていると必ずと言っていいほど青塚さんに出会い、「何かいたか、おめえには探しねえだろ」とよく言われましたが、気づいたら一緒に車で周ったり、フトバスや林内を一緒に歩いて鳥を探すようになっていました（写真1）。迷鳥や珍鳥、渡り鳥と一緒に探したり、トラフズクの繁殖の時期が近づくと、夜に鳴き交わしと一緒に聞きに行ったり、巣立ちの時期にはヒナの声

を聴きに森に行ったりととてもワクワクしたのが鮮明に思い起こされます。そして、青塚さんと周ると、青塚さんが迷鳥・珍鳥を呼び寄せているのではないかと思わせるほど色んな鳥を見ることができ、私だけでは到底見ることのできない鳥の世界を見せてくれ、識別点についてもいろいろと教えてくれました。



写真1：黒崎でウミネコを観察する青塚さん

また、何かあった時には早朝でも関係なく管理棟のドアをドンドンドン！！と叩いて、「おい！起きてるか！トラフの巣立ち雛が森にいるぞ！」とか「おい！赤岩のところにシャチがいるぞ！」と、さながら強制モーニングコールのように教えてくれ、その声で飛び起きて眠い目をこすりながら一緒に見に行くこともありました。一緒に林内を歩いたりしていると、「この林道付近にツバメオモトが数株あるんだ」、「サルメンエビネがもうそろそろ咲く頃だ」など、鳥以外の自然や植物にも精通しており、キノコ狩りをしたいと言えば「あのあたりに落葉きのこがいっぱいある」と一緒にキノコ狩りに行ってくれたり、島のことなら青塚さんに聞けば何でもわかるほど全てを熟知しているように思えました。もしかしたら青塚さんは自然そのもので、島と一心同体だから鳥が来たり、花が咲けば、何か背中のあたりがむずむずしてすぐにわかった

りするのではないかと思わせるほど、違和感があればすぐに気づく観察眼のすごさや勘の鋭さには圧倒されることが多々ありました。

更に、青塚さんは海鳥の保護活動にも30年以上関わっており、ウミガラス保護増殖事業においても多大なるお力添えをいただきました。赤岩に行く時はいち早く波を判断し、「今日の波だとワシリ（浅瀬部分の名称）は渡れねえな」と教えて頂いたり、「一緒に行きませんか？」聞くと「おれは、行かねえよ」と言いつつも、数年前までは歩いて赤岩まで来て、「おめえたち、だめだな～、貸してみろ！」と率先して作業をしてくれたりもしました(写真2)。現場で作業を終え歩いて帰ろうとした際にうねりがひどくなつてワシリを歩いて渡れない時でも、何も伝えていないのに、「おめえたち、早く乗れ！」と船で助けに来てくれたこともあり、本当に困った時にはいつも手を差し出してくれ、心強い支えとなっていました。またある時には、調査が遅くなり薄暗い中ヘッドライトを照らしながら海岸線を歩き、途中のワシリで波にもまれ全身びちゃびちゃに濡れてヘトヘトになりながら車まで戻ると、助手席にホカホカの蒸しあきびがホイルにくるまれて置いてあったこともあり、何か言うわけではないけれどいつも気にかけてくれており、心優しい心遣いに心がじーんと温まりました。

また、作業や調査が終わってお腹ペコペコで管理棟に戻ると、「炭をおこすか」と言って、ジンギスカンもよくやってくれました。お酒は一滴も飲まないけれど交流の場は大好きで、飲みの場では鳥の話や「海鳥繁殖地は昔畠だった」という話や「島の裏に採石場があり、その石で港を作った」といった昔の島の話などで会話が弾み、それを聞くのがいつもとても楽しみでした。そして、飲みの場で島の皆が口をそろえて

言うのが「まっつんは超人だからね」という話で、「まっつんが観音崎のあたりで海を見たら、タコがいたから皆に海の中にタコがいると言ったら誰も信じなかつたから、下に降りて行ってタコを捕まえて皆のところに戻った」とか「皆でダイビングをすると他の皆はボンベの酸素がなくなつて上がるのに、まっつんだけ上がってこずに皆の3倍位長く潜つてた」「生コン工場が島にある時は生コンを40kgほど背負つて歩いた」など数々の逸話を耳にしました。

赤岩での作業時には荷物の運搬を手伝ってくれたこともあり、荷物を運ぶ時は誰よりも重い荷物を背負つて運んでくれ、超人たる所以を目の当たりにし、誰よりも力強く逞しかつた姿が思い出されます。

そのため青塚さんが入院したと耳にした時は、「超人の青塚さんが??」と寝耳に水で、その後こんなに早く訃報を聞くことになるとは思つていませんでした。

私にとっては、鳥の師匠であり、祖父のような存在で、天売での仕事仲間のような存在もありました。思い起こせば語りつくせないほどいろいろな思い出があります。そのためこれから一緒に鳥を見て歩けなくなるのはとても寂しく思います。いつもそばで温かく見守つていただき、優しく時に厳しく助言をしていただき、本当にありがとうございました。まずはゆっくりとお

休みください。心よりご冥福をお祈りします。ですが、海鳥の保護活動はこれからもまだまだ続きますよ。早く戻つて来て下さいね。



写真2：赤岩でパネル設置作業をする青塚さん



写真3：ウミガラスの標識調査中の青塚さん

環境省天売支部！？の青塚さん
原中 つかさ※

（※環境省羽幌自然保護官事務所の自然保護官として、令和2年4月～令和5年3月まで在籍。現在は福島地方環境事務所に勤務。旧姓、平田。）

青塚さんは、環境省羽幌自然保護官事務所の天売支部職員かと思えるくらい、どっ

ぶり仕事でもプライベートでも関わつてくださいっていました。そのくせ、お金は一切受け取ろうとしません。

私たちは、ウミガラスやその他の海鳥の保護活動のため、羽幌から天売島に出張します。天売島にフェリーが到着すると、いつも当たり前のように出迎えてくれる青塚さん（写真1）。その後、環境省の管理棟で準備をするときも必ずと言っていいほど様子を見に現れます。渡船で赤岩や白磯に

行くときは、一緒に船に乗り、私たちが安全に岸に渡れるようにサポートしてくれます。それだけでなく、モニタリング機材のうち一番重たいバッテリーを持って運んで

くれたり、モニタリングカメラの電源となるソーラーパネルの設置を手伝って（いや、ほとんど青塚さんがやって）くれたり・・・。



写真1 当時の環境省羽幌自然保護官事務所メンバー（令和4年6月）

管理棟まで帰ってきてても一日は終わりません。自炊してご飯を食べながら、ふーっと息をついたのも束の間、青塚さんが訪ねてきて、夜の天売島を一周して、フクロウを見に行く流れになります。もしくは、「焼ぐかあ～」と言って、青塚さんの家の車庫でバーベキューです。ウニを丸ごと炭火で焼いて、トングで掴んでトントン叩いてトゲを取り、食べた味は、これまで食べた何よりもおいしかったです。

他にも、私たちが黒崎から赤岩までの海岸沿いを徒步で往復し帰ってきた頃には、黒崎の海岸からガードレールまでの草むらが歩きやすいように草刈りされていたこと

もありました。まりさん（アクティングレンジャー）に、一人で赤岩まで歩かせてしまった日には、無事に帰ってきたかの一報をずっと待って、いつでも助けに行けるようしてくれていました。

春は海上に飛來したウミガラスの写真を撮るために、毎日のように雪で通行止めの道路を赤岩展望台まで歩いて通っていました。そして提供いただいた写真は、環境省としてのウミガラスの飛来数カウントにも大きく役立っていました。

天売島で海鳥関係の報告会や意見交換会を開催するときは、当たり前のように参加するだけでなく、準備からずっと一緒に居

てくださいました。一度、いつものように青塚さんの車庫でバーベキューをしているときに、関係者の方との意見の食い違いにより耐えきれなくなった私がその場を飛び出してしまったことがありました。そんなときでも、青塚さんが追いかけてきて見つけてくれて、しっかり腕を支え、優しく声掛けしながら連れ戻してくださったことは、忘れません。

青塚さんは本当に環境省の一員かのように、一緒に活動してくださって、いつでも私たちの味方で居てくださり、私たちの心の支えもありました。

青塚さんの怒った姿は見たことがありません。いつもいたずらっぽく笑い、冗談を言い、半分くらいは、まりさんに通訳してもらわないと何を言っているか分からない青塚さん。みんなのことは基本的に苗字の呼び捨てで。環境省の管理棟だけでなく鳥研の建物にも友達のように居座って。天売島に来る珍鳥たちを、ばっちり写真に収め、見せてくれる青塚さん。管理棟に、どでかいソイやウニ、大量の貝などを「ほれ！」と持ってきてくれることもありました。食べ物を何でも燻すのにハマっていたときは、真っ黒に焦がしたタコを持ってきて、「これなんですか？」と聞くと「見て分からないのか」と冗談っぽく笑われました。春は山菜採りに、秋はキノコ採りに一緒に行ったりもありました。青塚さんは山菜を摘むのではなく、鎌で一網打尽に収穫します。バーベキューが好きで、羽幌にきても焼肉

屋に行きたがる青塚さん。

もういいよ～と思うほど、何かといつも行動を共にしていました。

今年の夏休み（令和7年7月）に、久しぶりに天売島を訪れました。夫と、羽幌から異動したときはまだお腹の中にいた娘（2歳）も一緒です。青塚さんにもお会いできて、念願だった娘にも会ってもらうことができましたが、元気がないなあとは思っていました。娘の手を握り、優しく微笑んでいました（写真2）。



写真2 夏休みに会いに行ったときの青塚さん（令和7年7月）

訃報を聞いたとき、全く実感が沸かず、ただ福島の雲一つない晴れ渡った空を見て、迷わず真っ直ぐに天国に行けたらいいなあなんて、現実逃避したことを考えていました。遠くて通夜・葬儀にも参列できず、これを書いている今もまだあまり実感がありませんが、きっと再び天売島に降り立ったときに初めて、とてつもなく寂しい気持ちになるのだろうなと思います。空の上でも、いつも通りの変わらない青塚さんでいることを心から願っています。

青塚さんの優しさに感謝を
北海道海鳥センター 越宗 菜保

はじめて青塚さんにお会いしたのは、2016年だったと思います。私はまだ学生で研究のために月1ペースで島へ行っていました。当時の環境省保護官に青塚さんを紹介していただいたのが最初の出会いです。今でも覚えているのが、はじめのころは青塚さんと会話をしてもまったく目を合わせてくれなかっただけです。警戒されていたのかなと思いますが、気がつけば島に入ると1日に何度も島のどこかで青塚さんと会うのが当たり前になっていました。鳥の情報を教えてくれたり、調査の様子を見にきてくれたり、晩ごはんのお誘いだったりと色々でした。いつも島へ行くと気にかけてくれて、そんな青塚さんの優しさがとても嬉しく、これから先もしばらくはその優しさに触れることができるものだと思ってい

ました。

2025年7月末に島でお会いしたときに体調が良くないことをお聞きしました。いつも元気なイメージだったので心配をしていました。次にお会いしたのが9月、海鳥センターのベンチでお話しをして、そこから間もなく、感謝の気持ちを伝えることができないままのお別れとなってしまいました。

私が海鳥センターに就職してからも、何度もセンターの仕事をサポートしてくださり、そして助けていただきました。2024年9月に開催した黒崎海岸のごみ拾いイベントでは、だれよりも大きなごみを運んでいました(写真1)。オオコノハズクの巣箱設置も手伝ってくださいました(写真2)。そして、今年の6月には巣箱で繁殖したオオコノハズクに標識リングを付けてくださいました。もしかしたら、このオオコノハズクが青塚さんの最後のバンディングだったかもしれません。



写真1：黒崎海岸清掃での青塚さん



写真2：オオコノハズクの巣箱を設置している青塚さん

まっちゃんとの思い出 先崎 啓究

なぜだかわからないが、天売島に鳥を見に行く機会がとても少なかった。弟が学生時代に島に滞在し、見つけだしたすんごい鳥情報を教えてもらったり、ウトウの帰巣の状況を書籍やテレビで目の当たりにしたり、北海道の離島の中でもとにかく魅力的な島だというのは知っていたというのに。思えば初めての天売島訪問は小学生の時今までさかのぼる。確か8月くらい、家族旅行での行先が天売島だった。行きの航路では、最初の10分くらいまでは兄弟でジェットコースターみたいだと船の縦揺れを楽しんだ記憶があるが、そこから先の記憶は船酔いによって何度も吐いたことしか覚えていない。船酔いを全くしない弟はケイマフリの夏羽を見た！ウトウを見た！とか

青塚さんと出会ってから10年が経とうとしています。出会ったころはまだ学生で教えてもらう立場でしたが、月日を経て年齢的に与える側の立場になりました。青塚さんの人間性や自然に向き合う姿は青塚さんの長い人生の中で培ってきたものなので、簡単に真似できるようなものではありませんが、大切なことを教えていただきました。これから先も青塚さんの優しさを何度も思い出でましょう。青塚さんからいただいた優しさを分け与えられるように日々を過ごしていきたいです。最後になりましたが、これまで優しく見守っていてくださったことへの感謝とともに、心よりご冥福をお祈りします。

言っていた。日帰りだったため、帰りにまた船に乗るのも地獄だった覚えがあるが、船にほとんど酔わなくなった今からすればいい思い出である。次の機会は十数年前、フリーランスの調査員として独立して、ガイドの仕事も視野に入っていた時期だ。ツアーカーのHPにガイドとしても紹介され、天売島に春の渡りを案内するツアーをその仕事を紹介してくださった先輩と立てていた。来年は初めていい時期の天売に行けると思い描いていた矢先、そのツアーカーはトラブルによって倒産し、ガイド業への道と天売へ渡る機会は失われたのである。

その後北海道へ帰ってきてからも天売に行く機会を作れずにいたが、2018年10月に妻が思い立って秋の離島で鳥を見たいと言い残し、一人天売島へ鳥見に行ってしまった。妻はその時にまっちゃんに会い、色々とお世話になったようだ。そして、旦

那は一緒に来ないのか?と尋ねられ、誘つたけど来れなかつたと返答すると、伝言を託されて帰宅した。曰く「旦那に北海道には天売島という島があると言っておけ」と。

もちろん青塚さんことまっちゃんについては弟から色々と話を聞いていたので、面識はないが知っていた。さすがにそろそろ天売島に行かないとなと漠然と思っていた数か月後、その機会は唐突に訪れた。ここ数年越冬している黒いケアシノスリ成鳥がこの冬も渡来していると聞き、2019年3月に仕事の合間を縫つて思い切つて見に行くことにしたのだ。弟に色々と情報を教えてもらい、島に到着後すぐにお仕事中の暢さんとまっちゃんはじめましての挨拶をする。伝言から数か月、まっちゃんと邂逅(かいこう)の瞬間である。天売島には2泊の予定だ。日中は島を歩き回つて黒いケアシノスリを観察する。用心深い個体で生身ではさすがに近くまで来てくれなかつたが、観察するには十分だった。初日の夜は萬谷さんの宿で暢さんとまっちゃんと部屋飲みした。弟のおかげでずっと知り合いだったかのような受け入れられ方で孫ほど年が離れているのにすぐにまっちゃん呼びを許してもらえた。昔の島の状況や最近の鳥情報

など様々な内容のお話しを聞けてとても楽しかったことを覚えている。夜も遅くなり、順調に出来上がつていて二人をよそに、まっちゃんはずつとガラナを飲んでいた。翌日の夕方はまっちゃんに誘われてガレージ焼肉をごちそうになった。せっかくなので記念写真を撮らせてもらい、SNS上で写真を共有すると、まっちゃんとなじみ深い共通の知り合いから、様々な驚きの声と元気そうで嬉しいというコメントが寄せられた。はじめてあまり知らなかつたのだが、どうやら先の黒いケアシノスリ並み、いやそれ以上に?まっちゃんは写真に対して用心深かったらしい。確かにスマホで写真を撮つてゐる時に「危ないやつだな」とつぶやいていた気がする。

それからは頻繁に連絡を取り合うようになった。互いの近況報告や天売の鳥情報、時に大量の魚を送つて頂いたりと、高校生の時に祖父を亡くした身としては大人になって孫ながらの気分。その年の秋に豊富町でチュウヒの生態に関する講演をする機会があり、たまたま本土にいたまっちゃんが聞きに来てくれた。その時も昔馴染みという富士元さんと久しぶりの再会を記念して、しぶしぶ記念写真を撮つた。



青塚さんと斎藤暢氏との焼肉（2019年3月9日）



青塚さんと富士元さんの再会 (2019年10月26日 豊富町)

その後も交流は続き、何度か夫婦そろって天売島に鳥見に行くことができた。バンダードもあるまっちゃんが亞種ハシブトアカゲラをバンディングする手伝いをしたり、オオノスリやコベニヒワを見に行った時にはお扈に家にお邪魔させてもらったりしたこと思い出深い。これからもずっと交流

が続くと思っていた矢先の訃報で、正直現実を受け入れるまでしばらく時間がかかりそうだ。ただ、与えてもらった思い出はかけがえのないもの。最後に会えなかったことは心残りだが、沢山の感謝と心からご冥福をお祈り申し上げます。

青塚さんを偲んで

長縄 淳

本追悼号に寄せられた方々と青塚さんのご関係を考えると、私などが追悼文を掲載させていただくことは大変おこがましく感じてしまいます。しかし、今回掲載のお誘いを矢萩君から受け、天売島での青塚さんとの一期一会は、長い短いの差はあれ、他の方々と違いはないと言い聞かせ、僭越ながらキーボードを叩くことにしました。

2020年4月から2022年3月までの

2年間、私は天売島に赴任しました。この間、コロナ禍にあり、自宅のある羽幌町に帰る機会も少なかった中、野鳥の魅力に沿ってしまいました。カメラを購入し、春や秋の渡りの季節になると、青塚さん始め天売島の鳥好きの方々にアドバイスをもらいながらフットパスを歩きました。野鳥の名前も分からぬ写真を見せるとき、積年の経験を生かし明確にそして親切に名前を教えてくれました。

2022年、天売島の赴任が終了し、羽幌の自宅に戻ったその年のゴールデンウィー

クに天売島を再び訪れました。フェリーを降りると知った方々がたくさんいる中に青塚さんの姿が。挨拶したとき私をからかうようにおっしゃった、「こったら時期に来ても何も撮れないべ」との言葉は忘れられません。

私の訪れた時期は、野鳥の顔ぶれが安定する季節であり、珍しい鳥が見られる時期は過ぎていました。青塚さんの「何も撮れない」とは「珍しい鳥」のことですが、私にかけてくれたあの言葉には、天売島を訪れる野鳥に対する「強い愛情」が込められていたのだと思います。

長年観察し続け、満足することなく、毎年毎年観察し続けた結果、「何も撮れない」と発言されたその裏には「もう少し早く訪れば、もっと魅力のある野鳥が見られたのに・・・」があり、そして「いつもの夏

鳥以外はもう見られない」という断言がありました。

私は青塚さんのように何かを断言できるだろうか？この先、明確な自信を持って、何かを言い切れる人になれるのだろうか？短いやりとりを思いかえすとそんな疑問が湧いてきましたし、改めて経験に裏打ちされた青塚さんの凄みを感じてしまうのです。これからも野鳥の写真を撮り続けますが、何かの拍子にふと、青塚さんとのあの短いひと場面を思い出すことでしょう。そして、断言することの大変さについて考えることになるのだと思います。

あの場面を心に刻みつつ、青塚さんのご冥福を心よりお祈り申し上げます。

追伸：羽幌町にある「cafe & inn 吉里吉里」には青塚さんの撮影したモノクロのオロロンチョウの写真が飾られています。

思い出は続く…

綿貫 豊

「北の海鳥」で企画いただいた青塚氏追悼特別号に20名を超す多くの皆様からご寄稿いただきました。こんなにも多くの人から慕われ、尊敬されていたのだなあと改めて感じます。島で世話になった人の中には、なかなか連絡が取れず、ここに文章を寄せられなかった方も多いと思います。私の記憶にある学生、研究者に限っても130名ほどになります。

来年もまた天売に多くの若者（と年寄り）が行きます。

これまでいつも楽しい話ををしていただいた姉さんとお話ししにまたお宅に伺います。

楽しい話を用意して。

古灯台の三角点にはじまり、黒崎海水浴場、赤岩へのルートとウミガラス、観音崎のハヤブサ、前浜港の防波堤、元ユースの番屋、フットパスの静かな林、天売港でレイバンのサングラスをかけて船を見送ってくれる姿、島のどこに行ってもそこでの青塚氏との、それぞれの人にとっての、出会いをくりかえし思い出すことでしょう。そして、そのことで再び勇気づけられることでしょう。

最後にします。

まっちゃん、これからも、天売の空からわたしたちのことをみまもってください。

編集後記

北の海鳥は秋号と冬号の年2回の発行です。今回は青塚松寿さんのご逝去を受けて、初めての特別号です。過去に千嶋淳さんがお亡くなりになった際にも追悼特集を組みましたが、この時は秋号として発行しました。今回は秋号の発行後で、冬号だと年が明けてしまうので、急遽特別号としました。年末の時間が限られている中で多くの方から記事をいただいたことを感謝します。

次号はまたすぐの2026年の2月頃に

発行予定です。原稿の執筆のご連絡は下記までお願いします。

hasebemakoto@hotmail.com (長谷部)
masayukisenzaki@gmail.com (先崎)
larus.gull.0415@gmail.com (矢萩)

北海道海鳥保全研究会は現在ほぼ会報誌の発行が活動となっています。「北の海鳥」は私、長谷部と事務局長の先崎さん、広報担当の矢萩さんの3名で運営しています。原稿の細かい部分まで確認していますがよりよい会報誌にするためですので、面倒をおかけしますがご理解の程よろしくお願いします。



2014年6月に黒崎海岸付近で操船しているまっちゃんを隠し撮り（佐藤信彦 撮影）

北海道海鳥保全研究会 編
会報誌 北の海鳥第二十二号
発行日 令和7年12月30日
発行所 札幌市西区発寒7条14丁目